

アルトゥロ・ウイ Arturo Ui

なんという時代だ。木々について語るのは犯罪に等しい。
それは多くの悪行に口を閉ざすことだから。

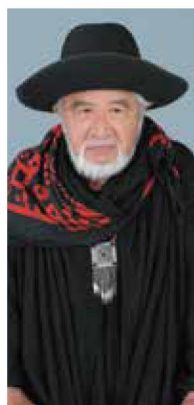
Was sind das für Zeiten, wo
Ein Gespräch über Bäume fast ein Verbrechen ist
Weil es ein Schweigen über so viele Untaten einschließt!



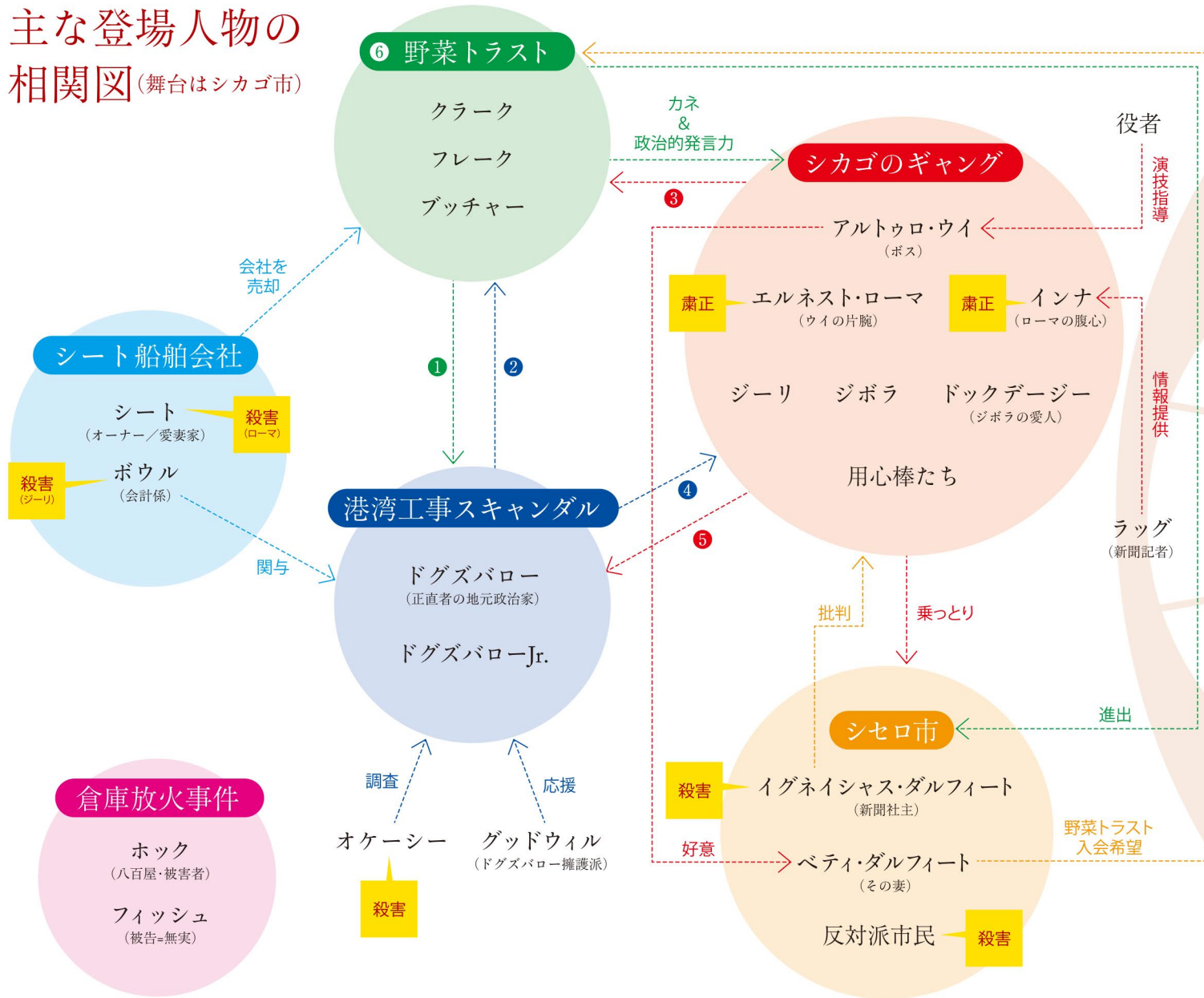
| | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 07 | 06 | 05 | 04 | 03 | 02 | 01 |
| 13 | 12 | 11 | 10 | 09 | 08 | |
| 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | |

CAST

01. 上田泰三…アルトゥロ・ウイ (ギャングのボス)
02. 高口真吾…エルネスト・ローマ (ウイの片腕・男色家)
03. 倉増哲州…マヌエレ・ジーリ (ギャング・帽子を集めるのが趣味)
04. 阿部達雄…ジュセッペ・ジボラ (ギャング・花屋・足が悪い)
05. 藤島淳一…用心棒
06. 森和雄…用心棒
07. 西田政彦…クラーク (商人、野菜トラストの幹部)
08. 得田晃子…ブッチャー (商人、野菜トラストの幹部)
09. 高島理…フレーク (商人、野菜トラストの幹部)
10. 久家順平…シート (船舶会社のオーナー)
…フィッシュ (倉庫放火事件の被告人)
…イグネイシヤス・ダルフィート (シセロの新聞社主)
11. 木元としひろ…ドグズバロー
12. 鈴木康平…ドグズバロー・ジュニア
…ホック (シカゴの八百屋)
13. 大野亜希…ドグズバローの召使
…少女
14. 谷屋俊輔…ラッグ (『スター』紙の新聞記者)
…グッドウィル (市役所の紳士)
15. 峯素子…オケーシー (シカゴ市の取調官)
16. 八田麻住…ドックデージー (ジボラの妾)
…ベティ・ダルフィート (イグネイシヤス・ダルフィートの妻)
17. 山下春輝…ボウル (シート船舶会社の会計係)
…インナ青年 (ローマの腹心)
18. 藤本栄治…役者
19. 音楽・演奏: 仙波宏文



主な登場人物の 相関図 (舞台はシカゴ市)



補足説明

- ① シート船舶会社の株を格安で譲る
- ② 市債公庫の貸付を口利きする
- ③ 野菜販売業界の独占を擁護する
- ④ スキャンダルのみみ消しを依頼
- ⑤ 警察・司法権力からの保護を依頼
- ⑥ **トラストとは…**

市場の利益独占と企業の合理化・資本の合併を目的としてとられる企業合同の形態。この物語の中では、シカゴ市の野菜卸売り販売業を彼らが独占し、野菜の値段を自由に決めているため、小さな八百屋を営む商人たちは高価な野菜を彼らから買わざるを得ない。

人物・事項対照表

ギャングを扱った歴史劇『アルトゥロ・ウイ』では、1932年～1938年のドイツの歴史がパラレルに映し出されています。

シカゴ市→ドイツ
シセロ市→オーストリア
ドグズバロー→ヒンデンブルク (大統領)
アルトゥロ・ウイ→ヒトラー (ナチス・ドイツ総統)
ローマ→レーム (ナチス・突撃隊幕僚長/ヒトラーによって粛清される)
ジューリ→ゲーリング (ナチス・ドイツ幹部/空軍総司令官等)
ジボラ→ゲッベルス (ナチス・ドイツ宣伝相)
フィッシュ→ファン・デア・ルツベ (オランダの共産主義者)
ダルフィート→ドルフース (オーストリアの独裁者/ナチスに抵抗)
野菜トラスト→土地貴族と実業家
八百屋→小市民
ギャング→ファシスト
港湾施設工事援助スキャンダル→東部援助スキャンダル
倉庫放火事件→国会議事堂放火事件

あらすじ

タイトルロールであるアルトゥロ・ウイはアドルフ・ヒトラーをモデルにしています。

そして、この作品の原題は『Der aufhaltsame Aufstieg des Arturo Ui(抑えればとまるアルトゥロ・ウイの興隆)』とあります。

ヒトラーがあらゆる手段を用い、独裁者としての地位を確立していった過程を、シカゴのギャングの世界に置き換えて描いた作品で、ヒトラーの興隆の歴史が巧みに組み込まれています。ヒトラーのような人物の登場は、民主的な憲法を持つ自由な国であっても起こりうることであり、そのキッカケになるものは身近に存在していることが描かれています。

原題に「抑えればとまる」とめることができた」とあるように、この作品は、ヒトラー本人だけでなく、その登場を許した社会環境をも厳しく見つめた作品です。

1場(クラーク・ブッチャー・フレック)

シカゴ市の中心街。野菜トラストの幹部である3人の実業家が登場する。

不景気で野菜小売業者(八百屋)たちの売り上げは下がっている。八百屋たちへ野菜を卸している野菜トラストもまた、売り上げは落ち込んでいる。

トラストの幹部たちは打開策として、正直者の地元政治家・ドグズバローへ、野菜を取引しやすくするための港湾施設拡張工事を名目にシカゴ市の市債公庫から金を貸し付けてもらえるように口利きを依頼する。

しかし、ドグズバローはこの提案を「ナマぐさい」と聞き入れない。ブッチャーは、ドグズバローを味方につけるための妙案を思いつく。

1a場(フレック・シート)

取引所の前。ブッチャーの案を聞いたフレックは、シート船舶会社のオーナー・シートの元へ行く。

彼もまた不景気の煽(あお)りを受け、会社経営に苦しんでいる。フレックはシートへ船舶会社を野菜トラストへ売却するよう打診する。

2場(ドグズバローとドグズバロー・ジュニア。ブッチャーとフレック)

ドグズバロー邸。野菜トラストの2人は市債公庫貸付の申請をあきらめたように見せかけ、新たな手が出る。正直者の政治家ドグズバローへ、シート船舶会社の株の過半数を格安で売却すると持ちかける。ドグズバローはかつて、シート船舶会社の社員食堂で働いていたこともあり、会社への思い入れもある。また息子に残せる財産もそう多くないことから、この提案を受け入れてしまう。

3場(ウイ・ローマ・ジボラ、用心棒、ドックデージー。後に、ラック。次いで、ジーリとポウル)

隠れ家。シカゴのギャングのボス・ウイは、近頃ふさぎ込んで

いる。先日、銀行との小競り合いで、警官に発砲され、裁判にもかけられたからだ。危うく収監されるところだったウイは、「どうすれば今後、自分の行動が警察や司法権力から守られるか?」を考えながら、日々過ごしている。

ラック(新聞記者)が現れ、ドグズバローが野菜トラストへ市債公庫貸付の口利きをしたことを告げる。

ジーリがポウル(シート船舶会社の会計係)を連れてくる。ポウルは、シート船舶会社の株が野菜トラストを通じ、ドグズバローの元に渡っていることを告げる。

正直者のドグズバローが収賄事件に関与していることを知ったウイは、好機到来とばかりに勇んで出て行く。

4場(ドグズバローとドグズバロー・ジュニア、召使。後に、ウイとローマ。次いで、グッドウイル)

ドグズバローの別荘。ドグズバローとジュニアはシート船舶会社の株を格安で譲り受けたこと、別荘を受け取ってしまったこと、市債公庫のカネを野菜トラストの幹部たちと共に着服してしまったことを後悔している。

ウイとローマが現れる。ウイはドグズバローへ、野菜トラストの護衛をする代わりに、警察と司法から自分の身分の保証をするようにと、願い出る。

しかし、ドグズバローは「自分は野菜トラストとは無関係だ」と請け合わない。ドグズバローの収賄を全て知っているとウイは脅しにかかるが、ドグズバローは怯えながらも、ウイの要請を断固拒否する。グッドウイル(市役所の紳士)が現れる。港湾工事スキヤンダルに絡む市の調査会が開かれ、ドグズバローも出席しなければならなくなったことを告げる。

5場(野菜トラストの3人。取調官オケーシー、ドグズバロー。後に、グッドウイル。次いで、ウイたちギャング)

市の調査会。市債公庫の貸付金が、港湾工事に用いられず、どこに流れたのかを明らかにするために開かれる。

野菜トラストの3人はシートに全ての責任を押しつけようとしている。グッドウイルが現れ、シートは前夜に殺害され、調査会に来られないと伝える。

ウイたちギャングが登場。疑惑を晴らすためにドグズバローが任命した調査担当者はウイだった。ウイは市債公庫の貸付金の全てはシートが横領していたと言っ。

取調官オケーシーは、昨夜殺されたシートに全ての罪を被せる魂胆かも知れないが、シート船舶会社の現在のオーナーはドグズバローで、貸付金は全て野菜トラストとドグズバローの元に流れていると厳しく追及する。

証拠はあるのかという問いに、オケーシーは新たな証人としてポウルを出席させようとするが、彼もまた調査会出席直前に殺害され、全ては闇の中に葬り去られる。

6場(ウイ、ジボラ、用心棒、役者)

隠れ家。ウイは役者から歩き方・立ち方・座り方・演説方法を学ぶ。

7場(ウイたちギャング。野菜トラストのクラーク。ドグズバロー。オケーシー。シカゴの八百屋たち。後に、ドックデージーと少女。)

野菜トラストの事務所。ウイは、シカゴの八百屋たちを前に演説する。殺人や恐喝、略奪が横行するこのシカゴの町で、野菜を平穩無事に販売するためには、ウイたちの護衛が必要であること、平和安全には金がかかることを熱く語っている。野菜トラストの幹部・クラークもまた「タチの悪い分子に扇動された労働者たちが賃上げを要求し、経営が難しくなっている」と述べ、ウイたちの必要性を説く。八百屋の一人・ホックは、ウイたちギャングの行動に懐疑的であり、そのことを率直に批判する。すると、火の手が上がると、ホックの野菜倉庫が放火されたのだ。

8場(裁判長、被害者ホック、被告人フィッシュ、オケーシー、ジーリ。)

裁判所。ホックの野菜倉庫放火事件が裁かれる。放火当日の夜に初めてシカゴへ訪れたフィッシュが放火犯の罪を被せられる。被害者ホックも目をつぶされ、ウイたちの賛成派になってしまう。司法の場もまた、ウイたちに制圧されていることが明らかになる。

9a場(オケーシー)

路上。取調官オケーシーの夫が殺害される。オケーシーは、「誰もこの伝染病ベスト(＝ウイ)を止められないのか!」と絶叫するが、彼女もまた殺害される。

9場(ドグズバロー)

夜明け前の別荘。ドグズバローは遺言状と懺悔録を書いている。ウイたちギャングの犯行を全て知っていたにも関わらず、真実に目を瞑(つぶ)り、沈黙したことを悔いている。

10場(ウイ、ジボラ、用心棒。後に、ジーリ。次いで、ローマ。クラークとベティ・ダルフィート。)

ホテルのスイートルーム。ギャングの活動は、彼らの身なりからも経済的に軌道に乗っていることが伺える。

とはいえ、ジーリとジボラが考える今後の活動方針案は、ローマとは異なり、その意見対立は表面化している。一方、ウイは一人、虚空を見つめながら新しい戦略を考えている。対立が激化する部下たちの言動に、ウイは「確固たる信念」を持つ自分に従うようにと、語りかける。

ジーリとジボラが去ると、ウイはシセロ市への進出計画をローマに打ち明ける。

ローマはウイへ、「その進出計画は、野菜トラストのクラークやドグズバロー、ジーリたちによる陰謀だ」という。そして、陰謀を企んだ彼らを粛清し、昔の組織へ立ち返ろうと説得する。古くからの友人・ローマの言葉を信用するウイ。

ローマが去ると、ジーリが再び現れる。クラークとシセロ市の実力者・ダルフィート夫人(ベティ)を連れてきている。彼らは、シセロ市進出に当たって、シート殺害の黒い噂があるローマと絶縁することを要請する。

しかし、ウイは自分の片腕を務めてきたローマを切り捨てることは出来ない。

11場(ローマとその腹心インナ。後に、ウイたちギャング)ガレッジ。ローマはウイとの18年にわたる友情について、腹心のインナに語る。

そこへ、ウイたちギャングが現れる。彼らはローマとインナがドグズバローの暗殺を企てたとして、二人を粛清する。

12場(ダルフィート夫妻。後に、ジーリ。次いで、ウイとジボラ。)

ジボラの花屋。シセロ市の新聞社イグネイシャス・ダルフィートは、ウイたちギャングによるシセロ市の八百屋の護衛について、「護衛を付けるかどうかは、自由に決められなければならない」と、意見する。

それに対して、ウイは「人間は自由を選ばなければならぬ」と、切り返し、「自分たちの行動に悪意を以て新聞に書き立てるのを止めるように」と、ダルフィートへ圧力をかける。

13場(ウイ、ジーリ、ジボラ。後に、クラークとブッチャー、フレック。次いで、ベティ・ダルフィート。)

墓場の前。イグネイシャス・ダルフィートが亡くなっている。「沈黙を守ったダルフィートが何故、殺されなければならなかったのか?」という問いに、ジーリは「黙っているだけでは不十分だ。俺たちのために大いに語ってくれる者がいるのだ」と、答える。

野菜トラストのブッチャーは「クラークがウイたちを連れてきたことが全ての不幸の始まりだった」と、嘆く。ウイは、夫が死んで間もないベティに対し、今後の身元の保護を約束する。ベティ・ダルフィートは「いかなるベストが世界に蔓延(はびこ)ったか」を知らせることで今後の生活を送ってゆくと、泣き叫ぶ。

14場(ウイとローマ)

ホテルのスイートルーム。ローマの亡霊がウイの前に現れる。ウイは悪夢にうなされる。

15場(シカゴとシセロの八百屋たち。後に、ウイたちギャングと野菜トラストのクラーク、ベティ・ダルフィート。)

街中。シカゴとシセロの八百屋たちは、「自分たちは無実である」という。「ピストルを突きつけられたから、暴力を回避しただけだ」と。

そこへ、ウイたちが現れる。ベティ・ダルフィートが野菜トラストへ入会したことが報告される。野菜トラストのクラークは、「野菜の値段は少し上がるが、より平和で安全に商品提供ができる」と、喜ぶ。ウイはドグズバローの遺言を引き合いに出しながら、シカゴでの八百屋の護衛についての実績を述べる。そしてシセロの八百屋たちに、「護衛を求めるかどうかを、諸君の自由意志によって判断して欲しい」と、語りかける。

シセロ市の反対派の一人が退席すると、すぐに銃声が響き渡る。八百屋たちは皆、両手を挙げて、ウイたちの護衛に賛成する。ウイは最後に「このウイの行く手を遮り、抑え止めることはできない」と高らかに宣言する。



『アルトゥロ・ウイ』上演に寄せて — 市川 明 (大阪大学名誉教授)

1933年2月、ナチスによる悪名高い国会議事堂放火事件の翌日、ブレヒトはベルリンを去った。チェコ、オーストリア、スイスを通じてデンマークへ。そこからスウェーデン、フィンランドへ逃れ、シベリア大陸を横断し、船でアメリカへ。それは15年に及ぶ世界をめぐる亡命の旅であった。亡命中の詩「抒情詩には向かない時代」を、ブレヒトは次のように結んでいる。「僕の心の中では争っている。／花盛りのリンゴの木への感動と／ペンキ屋ヒトラーの演説への戦慄が。／でも後者だけが／僕を駆り立て、ペンを取らせる」

ブレヒトはヒトラーをシカゴのギャング団のボス、アルトゥロ・ウイになぞらえた寓意劇を考えていた。ヒトラーはナチ党内の反対派を粛清し、財閥の後ろ盾を得て、政権を獲得、オーストリアを併合する。こうした歴史的出来事を盛り込んだウイの出世物語として、戯曲はテンポよく展開していく。1941年3月、ブレヒトのヨーロッパ最後の滞在地であったヘルシンキで、三週間たらずの間に第一稿が出来上がった。

ブレヒトはこのギャング歴史劇に二重の異化を施している。ヒトラーの世界をギャングの世界へ移し替えること、ギャングにブランクヴァースという「高尚な様式」で話させることである。ブレヒトは苦慮する。観客が登場人物のすべてに、誰がモデルかという詮索を始めると、作品はナチスの話を象徴化したものにとどまってしまうからだ。全編を滑らかなブランクヴァースという詩形で書くことにもブレヒトは相当の努力を払っている。



権力の行使と演出の力

柏木貴久子 (関西大学教授)

『アルトゥロ・ウイ』のモデルとして作者ブレヒトが念頭に置いていたのは、ナチスドイツを率いた独裁者ヒトラーと禁酒法時代に暗躍したアメリカのギャング、アル・カポネである。前者のカリスマ性と権力掌握の巧妙さ、後者の裏社会での暗躍ぶりが、ウイの人物像に反映されているが、ブレヒトは歴史上の人物を描いているわけではない。ウイはヒトラーともアル・カポネともイコールではない。ブレヒトはこの作品で、ナチスの台頭を資本主義から読み解き、それをギャングの世界に置き換えてみせた。周囲の人々を次々と取り込んでゆくウイの動きの中心にあるのは、皮肉なことに小市民性であることを示してみせたのだ。自ら政治を行うのではなく、周囲にある力、産業資本を利用することで影響力を付けていくウイ興隆の過程は、見方を変えれば、資本の原理に順応する過程でもあるからだ。作品中の「トラスト」は支配層であり、彼らと通じることで、小売業者すなわち被支配者層を従わせるウイは、必須食物を提供する青果業を通じて人々の生を左右するように見えるが、むしろそのことで資本主義が形成した社会の一部と化している。

ウイが勢力拡大とともに発揮するのが演説の才である。下敷きとなっているのは、大衆操作の典型と評されるヒトラーの演説である。劇場効果を発揮する古代神殿風の大建造物、サンスクリットからヒントを得た印象的な鍵十字、これをロゴマークとした旗、制服、装飾の数々、整然とした行進、明るい太陽または夜の松明など、演劇的効果が緻密に計算された空間の中で行われる演説は、

ヒトラーはミュンヘンで宮廷俳優のバーゼルから話術だけでなく動作のレッスンを受けていた。第六場ではこの様子が演じられる。「政治の演劇化」というヒトラーの陶酔的な演出に、ワグナーやベートーヴェンの音楽が利用されたことは疑いもない。思想家ベンヤミンの言葉を借りれば、ブレヒトはこれに対して「演劇の政治化」で応えようとした。ヒトラーの演説や安倍首相の所信表明に陶酔し、エールを送る人たちを見ていると、ブレヒトが打ち立てた「感情同化vs異化」という図式の意図するものがわかるだろう。1995年にベリリーナーアンサンブルで初演を迎えたハイナー・ミュラー演出の『アルトゥロ・ウイ』は、現在まで上演され続けている。演壇とトラックのモーターだけが置かれた裸の舞台。暗闇にシューベルトの『魔王』が鳴り響く。舞台が明るくなるとウイを演じるマルティン・ウツケが、真つ赤な舌を出し、四つん這いになってあえぎながら登場してくる。この哀れな犬がやがて世界を征服するところまで登り詰めるのだ。役者の登場場面はやんやの喝采だった。役者は90歳のミネッティが演じている。

それにしても「ここで勝利を喜ぶのはまだ早すぎます。——／やつが這い出てきた母胎は、まだ生む力を失っていないのですから」というエピソードは、いつ聞いてもアクチュアルだ。ミュラーの演出チームにおいて、稽古で僕はいつも彼の二列後ろの右にいた。今回は若い田中孝弥にドラマトゥルク・翻訳者として協力している。日本での上演が楽しみだ。

さらに右手を挙げる独特の敬礼の仕草、聴衆を見据える視線、少しそり気味の立ち姿など、意識的な身体性の導入により一大パフォーマンスとなる。第三帝国は映画という新メディアをプロパガンダに利用し、さらに造形芸術を対象とした芸術政策を導入することで独自の審美的世界を構築したが、作られた演出空間の中では演説者の身体もひとつの道具なのだ。演説における効果的な動きは、多角度からの撮影を基にした映像分析から計算された。大衆に対するヒトラー演説の勝利は、すなわち演出の勝利といえる。作品においてこれを戯画化するのが、ウイが老俳優に歩き方を習う場面である。カリスマ的人物に伴うはずの「大きさ」は、この場面の笑いで滑稽さに転ずる。神秘化が破壊される瞬間である。そしてこの脱神秘化こそが、実はウイの興隆を引き止める要素なのである。

この作品は私たちに、個人あるいは社会レベルであれ、権力の行使が実現されるメカニズムに意識的になることを教えてくれる。政治レベルではこう問うことができるだろう、テレビや新聞といったメディアは真実を伝えているのだろうか、パフォーマンスそのものを目的化している政治家はいないだろうか、と。彼らを影で支える資本はどこにあるのかを探ることで、言動の真意が見えてくるかもしれない。まずは疑ってみること——この作品が投げかけるのは、グローバリズムの時代にますます先鋭化してゆく資本原理主義への警鐘である。

サルに始まり、独裁者へ。

霊長目にはヒト以外に、200種類を超えるサルが存在するそうです。これらのサル類は系統発生的にヒトと近い関係にあるため、多くの病原体が相互に感染しうるらしいです。たとえば、赤痢・結核・エボラ出血熱などがサル類由来の感染症としてあげられます。そのため、改正感染症法(2005年)によって、ペットとしてのサル類の輸入は禁止されているようです。これは、サルにとっても良いことかもしれませんね。

この作品の中にもアルトゥロ・ウイ(「ヒトラー」)のことを指して、何度か「ペスト」という言葉が出てきます。「誰もこのペストを食い止められないの?」「ペストを根絶して欲しい。」「私は今後の生活を、いかなるペストが世界に蔓延(はびこ)ったかを知らせることで送りたい。」「などです。どうやら、「ペスト」死に至る伝染病「悪魔」「市民」「人間」「患者」「被害者」という図式のようなようです。ポクが小学生を過ごした1970年代から80年代、テレビアニメや戦隊モノの悪役キャラクターには、どこかヒトラーをモチーフにしたモノが多かったように記憶しています。

「ヒトラー」独裁者悪の象徴「悪魔」「市民」「悪魔」に導かれた被害者「本来は善良な人間」という図式とでもいえるのでしょうか。

ヒトラーは1945年4月30日に自殺していますので、もちろん、今はこの世にいません。しかし、第2次大戦後の世界を見渡しても、戦火が絶えません。そして、虐殺も今もシリアの内戦は続いていますし、先日は日本でも相模原で多くの尊い命が奪われました。どうしてこれほどまでに世界は混迷を深めているのでしょうか。あまり認めたくありませんし、考えたくもないのですが、

「ヒトラー」ポクたちと同じ一人の人間「市民」「悪魔」の英雄を求める性質を本質的に持っている生き物「ポクたち人間」こそが「悪魔」という意識(危機感)が、ポクたちにはあまりにも薄すぎるのかも知れません。

「ペスト菌」「ポクたち人間・市民」と言ってもいいかも知れませんが、ポク自身こんなことを書いていて不愉快ですが、でも、そうでも考えなければ、ヒトラーのような独裁者の台頭を「ポクたちが今後、抑えれば止められる」とも考えられないのです。

「サル」をスル賢い人や野暮な人をあざける言葉として用いるならば、ヒトラーのような「サル」を悪魔的英雄(独裁者)に仕立て上げたのはポクたち人間(市民)なのかも知れません。

サルと人間は相互に感染しうるのです。サルによって一方的に人間が感染させられるのではなく、ポクたち人間もまた「サル」にペスト(「悪魔」)を感染させるのです。だからこそ、ヒトラーがすでに死んでいても、「サル」はこの世界にまだ多く存在していますし、ポクたち人間(市民)によって彼らは感染し、悪魔的英雄(独裁者)が産まれ続けているのかも知れません。

ポクたちが「サル」に感染させ、そうして、独裁者となった「サル」は「ポクたちをサルにしている」のかも知れません。今の政治家のメディア戦略選挙戦略を見れば明らかです。そうしてこの感染の輪は抑えれば止まるどころか、さらに強力になり、拡大している気がします。

——こんな言葉を綴った後に、書くのもどうかと思いますが、清流劇場はお陰さまで20周年を迎えました。いつもご覧いただき、ありがとうございます。今回の公演もごゆっくりお楽しみください。



清流劇場 田中孝弥

20周年公演に寄せて

広瀬依子 (演劇ジャーナリスト)

芝居を見に行くと、チラシの束をもらう。これから行われるさまざまな公演のものである。開演前の座席で、あるいは帰りの電車の中で、それらを1枚ずつ見る。どんな内容で、どんな雰囲気なのか。1枚の紙から、それを想像するのが楽しい。そんな束の中に清流劇場のチラシが入っていると、わくわくする。美しい色と洒落たデザイン。俳優たちの斬新な衣装。興味をひかれるキャッチコピー。作品の概略、演出家の言葉。見たい、と思わせてくれるのである。清流劇場では、近年海外戯曲を積極的に上演している。ギリシャ神話をもとにしたゲーテ作『IPHIGENIE イフィゲーニエ』(2014年)の膨大なセリフは鮮烈だった。俳優が役の感情を表すことはもちろん大切だ。しかし、この戯曲は会話だけではなく、語りの部分も多い。観客へ状況や心理状態を伝える役割も必要なのだ。感情に走りすぎず、言葉を正確に伝える。観客はその言語の流れに身を委ねる。そこには生理的な心地よさがあった。セリフの持つ力と多様性を教えてもらった。レッシング作『賢者ナータン』(2016年)では、

価値観の多様性を強く感じた。12世紀末のエルサレムで、子どもをキリスト教徒に殺されたユダヤ教徒・ナータン。憎悪に満ちて当たり前のところを、ナータンはキリスト教徒の子どもをわが子として育てる。多神教の日本では、正直なところピンとこない展開かもしれない。だが海外には、寛容をこのように描く芝居がある。また、古典作品は人間関係が入り組んでいたり、登場人物の名前が難しかったりして、勝手に内容がわからないこともある。そこで劇団では、理解の手助けにと、公式サイト・パンフレットに人物関係図や丁寧な解説を掲載している。観客を大事にする気持ちが見えて嬉しくありがたい。上演に先立ち勉強会が行われることがあるのも、その一環だろう。私が出会った清流劇場の舞台は、作り込まれた世界だ。けれども、まちがいがなく共感の思いを持った。そこにあるのは人間普遍の感情であり、現代の私たちにつながっているからだ。20周年を迎えた清流劇場にお祝いを申し上げるとともに、これからも演劇表現の多様性を見せていただくことを楽しみにしている。



ライナー・マンケ (大阪ドイツ文化センター 館長)

清流劇場設立20周年おめでとうございます。20年といえば日本では成人、つまり「成熟」を意味します。清流劇場もまたこの20年間で芸術的に成熟し、その間に挙げた素晴らしい成果の数々を誇らしく思い、この節目の年を迎えられたことと思います。清流劇場は、ドイツ語圏の戯曲作品を多く上演してきました。代表の田中孝弥氏は、古典から現代まで幅広い戯曲を取りあげ、搾取や抑圧、社会格差といった社会が抱える問題に焦点を当て、警鐘を鳴らす作品を作ってきました。特に、社会を鋭く批判する作品を書いてドイツ演劇界に革命を起こしたことで知られるベルトルト・ブレヒトの作品に取り組むことで、社会問題を可視化し、変えるためのきっかけを観客に与えるような作品を提供してきました。この度の20周年記念作品『アルトゥロ・ウイ』の公演もまた、自分たちのいる社会を見つめ直す場所となるよう期待しています。私たち大阪ドイツ文化センターは、清流劇場のこのような取り組みを戯曲の提供や翻訳支援、演出家の招聘を通して支

し続け、2013年には『Woyzeck version Fukushima』がドイツ・ギーゼンのビューヒナー演劇祭に招聘されました。また2014年に大阪ドイツ文化センターが設立50周年を迎えた際には、ゲーテの『IPHIGENIE イフィゲーニエ』の新訳を記念公演として上演していただきました。私個人としても、清流劇場の公演はここ最近観た中で最も強い印象を受けた素晴らしい公演のひとつとして記憶しています。そのような作品を作り上げた田中氏をはじめ、出演者の方々にお礼を述べると同時に、これからの活動においても、益々のご活躍と尽きることない意欲と創造力、そして清流劇場を(厳しい目を持って)見守り続ける観客に恵まれることを祈っています。

清流劇場2016年10月公演

Arturo Ui

清流劇場ウェブサイトでは、過去の作品のダイジェスト映像や舞台写真を公開しております。是非、ご覧下さい。

□原作／ベルトルト・ブレヒト

□構成・演出／田中孝弥

□翻訳・ドラマトウルク／市川明

□出演／西田政彦(遊気舎)・上田泰三(MousePiece-ree)・峯素子(遊気舎)・八田麻住

高口真吾・得田晃子・谷屋俊輔(ステージタイガー)

木元としひろ(劇団感刺荘)・阿部達雄・藤島淳一(劇団アルファ)

久家順平・倉増哲州(南森町グラスホッパーズ)・高島理(mannequino)

山下春輝(ギョウザ・ブロン)・鈴木康平・藤本栄治(劇団潮流)

□音楽・演奏／仙波宏文

□特別協力／森和雄・大野亜希

ドラマトウルク／柏木貴久子 舞台監督／K-Fluss 舞台美術／内山勉 照明／岩村原太
照明オペ／塩見結莉耶 音響／とんかつ 衣装／植田昇明(kasane) 小道具／濱口美也子
写真／古都栄二(初テス・大阪) ビデオ撮影／竹崎博人(Flat Box) WEB・制作協力／飯村登史佳
宣伝美術／(cursor)カーソル：岡田ゆうや
協力／ボズアトル・座・九条・(南ウオーターマインド・(南ライタース・カンパニー・
(舞舞夢プロ・イズム・ピカロエンタープライズ・アティチュード・BAR HEAVENS KITCHEN・林英世・
佐々木治己・川口典成・木内ひとみ・嶋田邦雄・山下智子・森岡慶介・居原田司
制作／永朋 企画制作／清流劇場



平成28年度(第71回)
文化庁芸術祭参加公演



後援：大阪ドイツ文化センター



公演日程／2016年

10月19日(水) 19時

10月20日(木) 19時

10月21日(金) 19時

10月22日(土) 15時

(終演後、アフタートークがあります)
→出演者はwebで公表。

10月23日(日) 15時

※日本語による上演です。ドイツ語の字幕はありません。ohne deutschen Untertitel
※全席自由です。 ※会場内での飲食喫煙・写真撮影は禁止です。

会場／インディペンデントシアター2nd

〒556-0005 大阪府大阪市浪速区日本橋4丁目7-22 TEL.06-6635-1777

WEB:http://itheatre.jp

お問い合わせ／清流劇場

WEB : <http://seiryu-theater.jp>

E-Mail : info@seiryu-theater.jp

ベルトルト・ブレヒト (Bertolt Brecht, 1898～1956)

ドイツの劇作家、演出家。アウクスブルク出身。ミュンヘン大学在学中にデビューし、『三文オペラ』で一躍有名となる。1929年、ナチスから逃れて亡命生活に入り、各地を転々としながら詩や戯曲を執筆するほか、出版や政治活動にも力を注いだ。戦後は東ドイツへ帰国、ベルリナー・アンサンブルを設立し、それまで発表の機会がほとんどなかった自作品を多く上演した。情緒や娯楽性に偏重した従来の「美食的」演劇に反発し、新しい時代の演劇形式として、出来事を理性的・批判的に見つめる「叙事的(弁証的)演劇」を提唱。見慣れたものに対して違和感を抱かせる「異化効果」など、独自の理論や手法は、現在なお多くの演劇人に影響を与え続けている。代表作に『セチュアンの善人』、『肝っ玉おっ母とその子どもたち』、『ガリレイの生涯』など。

メンバー募集

清流劇場の活動に興味のある方、俳優・スタッフに興味のある方は、劇団まで、一度ご連絡下さい。

